



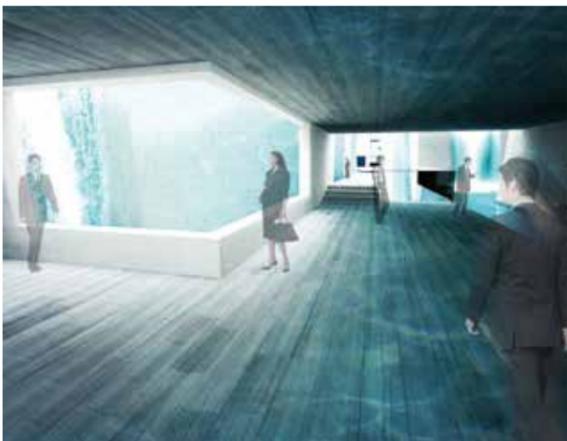
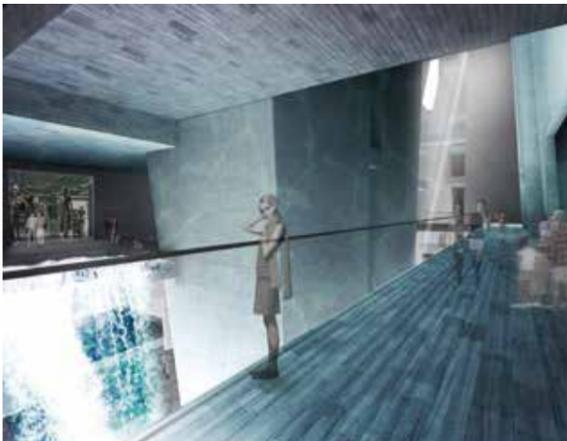
湧源都市

酒井 禅道 (さかい よしみち)  
千葉大学 工学部 建築学科

最優秀賞

JIA全国出品作品

伝い流れ、内部へと染み込み、時には激しく流れ落ちる過程のなかで、その透明度を増していき、かつて清流と呼ばれた川へと注ぎ込まれる。湧き出た水は川を潤し、都市を潤し、親水都市を形成する。水辺に群がる人々には新たな水に対する意識が生まれ、忘れ去られていた川に水が満ち、そして人が満ちていく。この建築は源泉を生む地形のような、流れる水路はその地形を流れ降りていく幾本もの支流のようなメタファーとして渋谷という都市に建つ。かつて清流と呼ばれた川がもう一度その水の流れを取り戻す為。



講評

相容れないもの同士が、ぶつかり合った時、見たこともない思わぬ反応が起こり、新しい創造が生まれる。自然と建築の化学反応のような提案「湧源都市」に、わたしは新しい建築の可能性を強く感じた。わたしたちが日常目にする渋谷の街は自然の景とは対極にあるが、作者は入念に歴史・地勢を紐解きながら、渋谷川に辿り着いた。衰退した渋谷川を都市のなかでどのように再構築していくかを、渋谷川の暗渠のなかに自ら入り込み、その状態を体感した上で、地球環境共生をからめた街の発展に結びつけている。川や水や緑の自然は、ただノスタルジックに保存復元すれば良いというわけでもない。もちろん、今のままで良いはずもない。だからといって、都市や建築は無秩序につくり更新すればよいというわけでもない。

自然と都市の新しい付き合い方、そして建築と環境の新しい関わり方を、高度水処理施設と雑居施設との融合によって巧みに内外空間が構成されている。そして多彩な水に関わるエネルギーの循環や利活用の提案が付加され、環境建築としての深度も増している。一見クサビを地球に打ち込んだようなシャープな造形のようにも見えるが、わたしには、逆に、地球の底からニョキニョキ映えてきた沼地の雑草や水田の稲のゆらぎにも見えて、生命力溢れる生き生きした様相を感じる。川や池のほとりに伸びてきた「水仙」のようでもある。

チューブは、時代に即してふさわしい位置に配し、萌芽を育てるように扱う。増改築などの新陳代謝を繰り返しながら、渋谷の街のなかで、ゆらぎながら、雑居ビルならではの、なぜかほっとする愛らしさをもって再生していく。その愛らしさとは裏腹に、「水仙」は球根をはじめ全草に毒を持っているという、この案に照らせば、雑居ビルの魅惑の緊張感も漂う。

シルクロードを辿り、日本をはじめ世界に美しく生息する「水仙」と同じように、渋谷川を辿る新たな環境建築群「湧源都市」は魅惑の都市モデルになる。

(審査委員：鳴海 雅人)

